
サイレン

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイレン

【ZINE】

Z5362F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

そのけたたましい音は無の世界にいた俺を無理やり覚醒させた。

現在何時か正確には分からぬ、それでもまだ寝ていらることは周りの空気で分かる。闇の中で耳を傾け聴いていたその音は遠くへ去つた。すぐ戻れるよつ瞳はさつきから閉じたまま。もう一度向こうへ…

そのけたたましい音は無の世界にいた俺を無理やり覚醒させた。現在何時か正確には分からぬ。それでもまだ寝ていられる事は周りの空氣で分かる。闇の中で耳を傾け聴いていたその音は遠くへ去つた。すぐ戻れるよつ踵はさつきから閉じたまま。もう一度向こうへ…

ウ～、カンカンカン

高性能の目覚まし。一般車や歩行者への警告か、はたまた『俺達の仕事を増やすな』という警鐘か…

夜なんだから、半分ぐらいの音量にしてくれりやいいのと思つ。余韻なのか、まだ遠くから聴こえるのか、耳に残るこいつを判別するには難しかつた。

女が好きそうな可愛いキャラが画かれた壁の時計のおかげで時刻が判つた。あと数分で午前一時、深夜ともいえぬ微妙な時間だ。ふと横を見れば女の寝顔。これは俺の彼女のサオリ。元々小さいくせに、布に包まつて小動物みたく丸くなつてるんでソファーにすっぽり。安らかな可愛い寝顔。だんだん頭が冴えてきた。

今日は日曜、いや、正確にはもう月曜か。夕方からサオリと一人で鍋やつて酒飲んで、そんでTV見てたら寝ちまつたみたいだ。授業は一限からだし、こんな時間に日を覚ますなんてついてない。いや、それより寝るのが早過ぎた。鍋が皿からつてハイペースで飲みすぎたか。そんなこと思つてたら、本日3度目、無敵の目覚ましが部屋の側を通つていつた。

カンカンカン…

分かつてゐる、あんた達の仕事は増やさないつて…
田の前にはそれでも平然と寝てる奴。無敵つてのは言い過ぎた。

何だからもう一度寝るのも面倒くさかった。俺の目は難しい試験に挑めるくらい冴えていた。そしたら沸き起こってきた衝動。煙草が吸いたい。

ところが此処にはルールがある。彼女の前では禁煙。付き合い始めてから一度も破つてない約束だつた。部屋の外に出て吸うのも禁止、だから煙草を彼女の家に持ちこむのも禁止。デート前の一服には、カモフラージュの香水と口臭処理が必須。俺の部屋には様々な香りの消臭スプレーが揃えてある。僅かな臭いでも察知すれば忽ち不機嫌になるんで一本吸うのも大変。だからヘビースモーカーはすぐ卒業出来た。でも完全には止め切れてない。悲しい性。

俺と彼女の出会いは此処の最寄り駅だつた。帰宅途中の車中で斜め向かいに座つた女、偶然降りる駅が一緒だつた。あんまり可愛いんで人生初のナンパ。その成果がこれ。訊けば同じ年で女子大生。方向は違つたけどお互い駅から5分の所に一人住まい。その日からお互いの家を行つたりきたりする生活が始まつた。

そんなんで、一旦家に帰れば煙草が吸える。俺は彼女の寝顔を見て微笑んでから立ち上がり、部屋を後にした。

ここ半年、何度も通つてゐる道、酒が残つてゐる筈だが気分は悪くない。心地よい夜風を受けながら俺の住むマンションの近くまで来た。異変はすぐにわかつた。闇を照らす赤い光、それを放つ車を囮む野次馬達。マンションの一室から黒煙が上がつていて。こりや落ち着いて煙草どころじやない。俺は窓から炎が飛び出すその様子を見ながら考える。五階の右から四番目、五一、五二、五三、五四

四？俺の部屋？

夕方から留守だつたし、原因は何だ？買つて数年の電化製品がシヨートするとも思えない。俺は消防隊員に詰め寄ろうとした。

だがそんな俺の肩を誰かが掴んだ。

振り返ると眼鏡をかけた見知らぬ男。40代前半で一見眞面目な教師顔。でも何となく狂氣を感じさせる顔だつた。

何も言わずに俺を見る男。俺も何故かそいつの顔を見つめる。

「思い出した下山！」

俺は思わず男に向かつて言った。

だが男は、にやつと笑つただけで何も言わなかつた。

俺はその不気味な笑顔見てゾクつと何かを感じた。同時に高校時代の記憶が甦つてきた。俺はこの不気味な笑顔を一度だけ見たことがあつた。

高校の体育館、この笑顔はでっかいパネルに入れられ全校生徒の前に晒されていた。たしか高一の春だつたか、こいつ、数学教師の下山が事故つて死んだのは。

目の前の死んだはずの男が口を開いた。

「私を覚えてるか？私は君を覚えてるよ、高倉優太君。私はこの日をずっと待つてたんだ。高倉優太！お前のせいで私は死んだんだ！」顔だけじゃなく声も不気味だつた。それに俺のせいつて、こいつとは授業以外で話したこともないはず。

「今でも思い出す。お前はあの日、私が黒板に書いた数式の間違いを指摘し、こう言つた。『先生そんなの間違えないでください』教室に響く微かな笑い声、それと同時に私の耳に飛び込んでくる女子生徒の囁く声『先輩が言つてた。下山は使えないって』」

下山の目は見開き、顔は真つ赤になつていた。

「お前は顔も頭も良い、おまけに親は金持ち。何不自由なく過ごしてきたんだろう。だが私は違う！精一杯やってようやく高校の教師になつた。私はお前みたいな奴が嫌いなんだ…。私はお前にムカついてアクセルを強く踏み込んだ…」

そんなの言い掛かりじゃねえか…、俺はそう言いかけたが、下山は話を止めない。

「俺はこっちの世界に来てから、ずっとお前への復讐を考えていた。その為には辛い我慢が必要だつた。病人の痛みを半分受けて和らげてやつたり、社会のクズみたいなガキの子守り、そうしてやつと煙

草一つ動かせるエネルギーを得た

「は？ 煙草だと？ 何言ってんだ」

「くつくつく、覚えてないのか？ 教えてやる。お前は少し前に部屋に帰ってきて煙草に火を点けた。そして、そのまま寝ちまつたんだ。俺はその火のついた煙草を床の新聞紙の上に落とした…」

下山がそう言って、再び不気味な笑みを浮かべた瞬間。奴の首はスパツッと綺麗に吹っ飛び俺の前には奴の胴体だけが残つた。だが血は一滴も飛ばなかつた。そしてすぐに目の前の胴体はスッと消えた。見てはいながら飛んでつた残骸も同じだろ。

唚然としてると今度は背が高くてすらりとした真っ白な奴が登場。顔のパーソは何にもない。例えるなら真っ白なマネキン。

「怖がらなくていい、私は君に説明しにきただけだ。奴の首を飛ばしたのは私ではない、あれは死神の仕業だ」

どうから声がでるのか分からぬけど俺の耳にはマネキンの声が入つてくる。

「君は、手違いで死んでしまつた。生き返らせてやりたいが、それは出来ないんだ」

「待つてくれ、死んだって？」

「ああ、あの男の言う通り、君はまだあの部屋の中にはいる」

マネキンはそういうて煙の出ている部屋へ顔を向ける。

「何言つてるんだ。俺はさつきまで彼女の家で寝ていた」

マネキンは俺に顔を戻す。

「それは私が記憶を取つたからだ。当たり前だが死の前には酷い体験が待つていて。そんな記憶は存在しないほうが良いだろ」

確かに、燃えてるあの部屋がどれだけ熱いか、俺には分からなかつた。

「それで君の記憶は少し前に戻り彼女の部屋で田を覚ましたんだろ。君は靈によつて殺されてしまつた。お詫びといつては何だが、君は気が済むまでこの世界に残つていられる」

「どうしたことだ？死んだんだろ？」

「生きてる人間に君の姿は見えない。まあ、たまに見える奴もいるが、そういうのに自分から接触することはしないでくれ。この世界には、未練を残して死んでしまった奴らが残っている。だが力を与えられるのは君の様な極一部だ」

「力？あいつが言つてた煙草を動かすみたいな事か？」

「いや、あの力は別だ。奴には何も与えていない。奴は下等靈の仕事を手伝い、その結果ほんの僅かなちっぽけなエネルギーを得た」「そのちっぽけな力で俺が死んだと…」

「…悪い。だがその分、君には力が与えられる。例えば家族を病氣から守つたり。君に関わったことのある人に良い事をしてやれる。それだけじゃない、君の様な極一部の靈は生前と同じように快樂も味わえる。何か食いたいと思ったら念じてみろ、何でも出てくる。おまけに食つた後の満腹感が無いから好きなだけ食える。何処へでも行けるし。同じように力を与えられたもの同士なら触れ合うことも可能だ。病氣も無ければ痛みも感じない。安心しろ触れ合つたときの快感はしつかり残つてる。デメリットは生きてる人間と話せないことぐらいだろう…」

一気に説明を終えたマネキンは最後の言葉を残して一瞬で消えていった。

「珍しいよ、自分が死んだことを告げられもすぐに冷静になつた。強い男だな…」

俺はしばらく立ち竦くしていた。試しに右手を見つめ、飲み物が出てくるよう念じる。瞬きした瞬間、俺は冷たいコーラのボトルを握っていた。飲んでみると乾ききつた喉に流し込んだときのような爽快感。いくら飲んでも重さは変わらなかつた。ずっと同じ、いくらでも飲めそうだった。

何だか後ろで野次馬がざわついていた。だが俺は振り返らなかつた。

向かいの公園に移動した。そのまま草むらに横になり星空を見渡す。思つていた以上の星の数。何処からか野良犬が近づいて俺の体を通過していった。それで俺は透明人間なんだと自覚した。何故だろう俺はそのまま眠つてしまつた。

目を覚まして驚いた。サオリが横に座つて俺を見ながら静かに微笑んでる。ここは死体安置所でも葬儀場でもない、草むらの上。こいつ靈感あつたつけ？俺の顔見てるんだよな。じやなきや草を見て微笑んでるつて事だし…

「サオリ？」

俺は試しに声をかけた。

彼女はその声に反応し首を少し傾けた。

「わかるのか？」

そういうつて俺は半身を起こす。その途端サオリは俺に抱きついてきた。

「どうなつてんだ？」

俺は彼女の耳元で囁いた。

「わかんない、優が死んだの知つて、気が動転して。それでどうやつて死んだのか覚えてない。白い人もそれは知らないほうがいつて教えてくれなかつた。」

「バカ」

俺はそんな一言しか言えなかつた。

「だつて優が居なくなつちゃつたんだもん、どうじても会いたくて

振り絞るよつこして出された彼女の声。

「…でも優に会えた」

彼女はそう言つた唇で、ごめんと言いかけた俺の口を塞ぐ。その瞬間何処かに向かう救急車のサイレンが聴こえてきた。俺は彼女の唇を感じながら涙を流していた。

(\overline{L})

(後書き)

11・27　自分でも読み難かったので…前半部分を少し直してみました。

オチが淡白に感じる…

じゃあ何で書いたかといつと、冒頭のサイレンで実際に目を覚ましたから…

そこを書きたくて残りは一応まとめつつ適当に書いた。

最近読んだ石田衣良の「WGP」の影響で、書き方が似てしまった。

流れされやすい自分。

ドラマは当時見てたけど、小説は今頃初めて読んだ。話はわかつても面白い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5362f/>

サイレン

2010年10月8日15時52分発行